

アニメ聖地に形成された組織とその動態の変化

関西学院大学 経営戦略研究科 博士後期課程

湯川 寛学

要約

本論文は、アニメの舞台となった地域（＝聖地）において、その地域に形成された組織を分析対象とした。アニメの舞台を訪れる聖地巡礼者の中には、その地域を何度か訪れることでその地域自体を好きになったり、顔見知りが増え、そこに集うメンバーに会いにくること自体が目的となったりする巡礼者が存在する。また、最終的には移住をもしってしまう巡礼者がいる。そこには聖地に形成された組織の影響がある。これまでアニメ聖地に形成された組織に着目した研究はなかった。本論文では、「らき☆すた」（聖地：埼玉県旧鷲宮町）、「けいおん!」（聖地：滋賀県旧豊郷小学校）、「涼宮ハルヒ」シリーズ（聖地：兵庫県西宮市）、「ガールズ&パンツァー」（聖地：茨城県大洗町、以下ガルパン）の4つのケースを分析した。分析の結果、どの地域でも共通目的のない非公式組織から共通目的のある公式組織が出現し、時間の経過とともにそれが変化していることが明らかになった。

キーワード

聖地巡礼, 公式組織, 非公式組織, 相互作用, 協働

I. 本論文の目的

近年、テレビの深夜枠を中心にアニメコンテンツは増え続けている。以前と比べ、制作側の技術も上がりアニメの背景までもくつきりと描かれるようになった。実際の風景を使用したものも多く、視聴者（アニメオタク）はインターネット上で、それがどこかを特定しようとしたり、特定後は実際にその地域を訪問したりする。それは聖地巡礼と呼ばれるようになった。多くのアニメオタクが、アニメをきっかけに舞台となった地域を訪れ、アニメ中と同じ角度で写真を撮ったり、アニメキャラクターと同じ格好をしたりする（湯川・佐藤, 2017）。人が集団として行動するところには必ず相互作用があり、それに基づく影響が見られる。その中で、特殊な密度を持つ人間関係に基づいて非公式組織が形成される（Barnard, 1938/1956）。聖地にも組織が形成された。共通目的のない非公式組織から共通目的のある公式組織が出現した。組織にはリーダーが出現し、時間の経過とともに組織自体が変化していく。アニメ聖地に形成された組織に着目した研究はこれまでなかったため、本論文では、その組織の形成プロセスを考察し、その動態の変化

を明らかにしていく。

次の第II節ではこれまでの先行研究を記述し、第III節では分析方法を述べる。第IV節では4つのケースを簡潔に紹介する。続く第V節でそれぞれのケースから明らかになったことを論述している。そこから明らかとなった理論的貢献と実務的貢献を第VI節で示している。

II. 先行研究

アニメ聖地に形成された組織に着目した研究はこれまでなかった。アニメ舞台の聖地化のプロセスとメカニズムを明らかにした湯川・佐藤（2017）は、アニメオタクには5種類のタイプが存在すると考えている。その中でも「聖地巡礼オタク」は地元の人々やオタクとの交流を重視し、アニメ聖地の聖地化のためのハード・ソフト両面の活動を使命とする。谷村（2011）は、旧豊郷小学校の状況から、そこに見られる「コミュニティ」のあり方とその可能性を論じている。また別稿で、アニメ聖地巡礼者が、アニメ聖地となった地域に向ける欲望について論じている。また、アニメ聖地

巡礼者は、地域との関わり方で地域主催のイベントにボランティアとして参加するなど能動的に地域と関わっていることを指摘している。アニメ聖地に関する研究は岡本健、山村高淑が詳しいが聖地に形成された組織に着眼した研究は行っていない。

組織論の先行研究として、Barnard (1938/1956) は、組織の構成要素は、伝達、貢献意欲、共通の目的としている。これが外部事情に適するように結合することができるかどうかが必要と主張している。また、組織構成員の協働意欲、つまり協働体系へ努力を捧げようとする自発的意志が不可欠としている。

そして、組織の発生は以下4つの異なった方法のうちのいずれか一つから生じると述べている。

- (a) 自然発生的
- (b) 個人の組織努力から生じた直接的な結果
- (c) 現存する母体組織から育成された若い組織
- (d) 分裂、反逆、外力の干渉によって現存組織から分離したもの

リーダーの必要性も論じており、適切な意思決定や情報の伝達経路における混乱の解消のためにリーダーは必要としているが、リーダーをその機能としてのみしか見ていない。

共通目的のある公式組織は共通目的のない非公式組織から発生するとしており、非公式組織については個人的接触や相互作用の結合であると定義している。しかし、誰が、何を、どのようにすれば非公式組織から公式組織が発生するのかは述べられていない。

非公式組織では相互作用が生まれ、お互いに影響され、それに関与する個人に変化が生じる。非公式組織は、不明確、はっきりと区別できないものであるが特殊な密度を持ち、共通目的はないが、重要な共通の結果が生じるとしている。伝達や結合性では公式組織よりも優れており、それは個性が組織の中で埋没せずに発揮されるからだとしている。

III. 分析方法

本論文では、4つのケースを用いてケーススタディ・リサーチを行った。「らき☆すた」の聖地である埼玉県旧鷲宮町、「けいおん!」の聖地、滋賀県旧豊郷小学校、「涼宮ハルヒ」シリーズの聖地、兵庫県西宮市、そして「ガールズ&パンツァー」の聖地、茨城県大洗町である。その選定基準としたのは、メディア記事の評価やインターネット上の声、また、著者自身で聖地を“巡礼”し、現地の人の声を聞いた上での主観的判断を基に選定した。成功例として判断したものをケースとして選定しているが、これはブームという一過性で終了せず、数年に渡って“聖地巡礼”現象が起き、それがまちに浸透しているという基準で選定している。

IV. 各ケースの紹介

1. らき☆すた

埼玉県・鷲宮地区には毎年9月に行われる土師祭というお祭りがある。2007年のアニメ「らき☆すた」放送開始直後からアニメオタクが鷲宮神社周辺を訪れ始めた。地元で聖地巡礼者が来始めたことに気付いた商工会の若手職員2名は、著作権元の角川書店へ「鷲宮町（当時）としてお土産になるようなグッズを販売したい」と問い合わせをした。商工会はグッズの企画提案を行ったが、その際角川書店から逆に、鷲宮神社等を利用したファン向けのイベントを企画・開催してはどうかという逆提案を受けた。その結果、2007年12月に商工会と角川書店が共同主催した「『らき☆すた』のランチ&公式参拝 in 鷲宮」と題したイベントが開催され、3,500人あまりの参加者を集め大盛況となった。その後、角川書店は常に著作権関係の窓口として商工会と関わるようになり、商工会主体で幅広くグッズ展開やイベントが開催されることとなった。こうした動きを受けて町全体が「らき☆すた」を盛り上げ始めた。2008年4月に登場人物の「柊一家」を特別に住民登録し、その際1枚あたり300円で「特別住民票」をファンに交付した。交付初日には全国から2,760人ものファンが訪れたという。

地元商工会は聖地化に気付き、訪れてきたファンへの聞き取り調査などを行っていた。そこで何人かのファンが企画のアイデアを練るのに協力してくれるようになった。この時のファンの1人が、その後現在まで続くボランティアスタッフのリーダーとなる人物である。ボランティアスタッフは、この時期から常時5、6人が商工会の会議などに参画しており、イベント時においては15人ほどのスタッフが駆けつけるということだ。このボランティアスタッフの存在によって、商工会はファンのニーズを的確につかみ取ることができ、不足していたマンパワーを補うことが可能となり、そしてファンとの交流も生まれるようになった。さらに、地域側のイベントも、ファンとの交流を一層促進することにつながり、地域とファンとの協働によるまちづくりが展開されていく。

その象徴的な現象として土師祭を取り上げる。土師祭は、9月の第1日曜日に鷺宮神社に奉納されている「千貫神輿」を担ぎ、まちを練り歩く伝統的な祭典である。土師祭実行委員の鈴木卓男副会長（当時）は、「らき☆すた神輿」の起源について「(祭で)神輿を担ぎたいって言うの。らき☆すたのファンが。あなた方にはその(貧相な)身体じゃ無理だと断った。だから『子ども神輿でも担がせるか』と言ったのが最初だった。それも冗談だったのに、インターネットに流れちゃったんですよ」と語る。2008年、「らき☆すた神輿」の登場を告知すると、当日の見物客が前年より2万人も増えたという。当初、「らき☆すた神輿」はこの年限りの予定だったそうだが、鈴木氏は「らき☆すた神輿の担ぎ手が泣き出しちゃった。『来年もやってくれ』って。そしたら(祭の)会長が『なんとかやれるように努力します』と言っちゃったら、インターネットに流れちゃって。今年もやる、来年もやる」と明かした。らき☆すた神輿準備会代表の大木敏久氏は、「元々祭って自分たちオタクのものじゃなくて、一般の人たちのものなんですよ。うちらマイノリティのものではなかった。そのマイノリティの自分らでもこの祭に立派に参加できる。自分たちにとってはすごく貴重な場所です」と話す。

この祭の見所は、関東最大級の千貫神輿。関東一円から約1,500人がこの神輿を担ぐために集まる。伝統ある神

輿の担ぎ手たちは「らき☆すた神輿」について、「ウェルカムウェルカム。らき☆すたウェルカム」「すごい!」「祭って皆が盛り上がりやすいと思うんですよ。みなさん楽しんでるからすごく良いと思いますよ。これからも続けて欲しいなと思いますね」と歓迎している。祭には外国からの参加者もいる。アメリカ・ニューヨーク州在住のマイケル・クオコさんがこの祭に参加するのは5回目。「10年前から『らき☆すた』が好き。伝統の祭と現代の文化、それが交じり合っている所が好きです」と語った。千貫神輿がスタート地点に戻ってくると、これまで神輿を担げていなかった人が一斉に押し掛け「もみ合い」に。土師祭のクライマックスだ。一方の「らき☆すた神輿」は平和にゴール。「We are らき☆すた〜!」と声をかけ、大木代表の胴上げで終わった。鈴木氏は「お兄ちゃんたちから『来年もね』って言われちゃ『そうだね』って言っちゃうよな。みんな楽しみにしているんだもん」と笑顔を見せた。

その「らき☆すた神輿」の準備ため、アニメオタクたちは当初1年に1回編成していた組織を2014年から常設することとした。組織名は「らき☆すた神輿準備会」で、その目的を(1)土師祭「らき☆すた神輿」の運営に一助すること(2)土師祭以外における「らき☆すた神輿」の展示等で必要な手助けをすること(3)「らき☆すた神輿」の保存に一助すること、とした。神輿だけではなく、お祭り後、率先して片付けやゴミ拾いなどをする。代表や代表補佐を設け、広報、企画、総務、庶務の各担当者も決め組織を動かしている。

代表の大木氏は、最初は「らき☆すた神輿」を担ぐことで参加していた。「らき☆すた神輿準備会」が発足してからは、神輿の製作にも関わるようになり、リーダーを務めることになった。とにかく「らき☆すた神輿」を継続させたい、という一心だった。年を重ねるごとに「らき☆すた神輿」が盛り上がり、関わる人も増えていくが、元々ある千貫神輿の方の負担が大きくなってしまった。「らき☆すた神輿」を継続させるため、ファンが中心になって取り組む必要があった。そして、準備会を発足させ、現在では40名ほどが参加している。全員ボランティアだが、泊りがけで神輿の準備に

来たりしている。そのモチベーションは、自分たちの居場所を守りたいということだ。大木氏は「地元の方が『らき☆すた』ファンを受け入れてくれたことが大きいと思うんです。鷺宮の人たちは、『らき☆すた』ファンに対して、否定的な態度をとったことは一度もありませんでした。いつ鷺宮を訪れても温かく受け入れてくれるのが本当に嬉しかった。『らき☆すた』ファンの間では、帰郷というと鷺宮に行くことを指すんです。それくらい鷺宮に対して愛着を持っています(笑)」と鷺宮との関係について話している。

2. けいおん!

2009年4月の「けいおん!」第1話放送終了後、インターネット掲示板2ちゃんねる上では感想が書き込まれ、深夜にも関わらずアニメオタク同士のやり取りが活発に行われていた。放送終了後、約3時間でアニメの舞台は旧豊郷小学校と特定された。当時商工会青年部の部長だった宮川博史氏は、後輩から「けいおん!」で旧豊郷小学校が舞台となっていることを聞き、「らき☆すた」の鷺宮のように大変なことになると言われたが、あまり実感が湧かずそうなるのか疑っていた。その時、旧豊郷小学校は工事中であったが、校舎の周りをアニメオタクたちが巡礼し始めた。工事が明けた初日、訪問者をもてなすため、宮川氏は校舎の前にテントを張り、うどんを振る舞った。その時は結構な人数が訪れ、その状況を見て、役場、商工会青年部、観光協会が集まって今後どうするかを会議した。実行委員会を作るということになり、宮川氏が委員長に任命された。実行委員長としてどうしたらよいかわからなかったため、訪れている人たちに「何したらいい?」と聞いてみた。アニメ中と同様に「音楽室でお茶したい」と言われたが、アニメ中では音楽室と設定されていた校舎3階の会議室は水回りの設備がないため不可となった。しかし、現在カフェとなっている場所なら少し改装すれば大丈夫ということで、最初は紙コップにコーヒー程度だったが「けいおん!カフェ」を開くことになった。当初は「女装している人がいる」など苦情も多く、アニメオタクへの偏見や周囲とのギャップがあった。

宮川氏はアニメの分野に疎く、当初は抵抗があったが、

アニメを見て、映画も見て、日本武道館に声優のライブにまで行った。「らき☆すた」の鷺宮と同様にイベント等をするため、著作権元に何度も交渉したが認められなかった。

しかし、「けいおん!カフェ」には多くの巡礼者が訪れ始めた。楽器やグッズも多く寄贈され、絵馬も飾られた。人が集まれば同じ趣向を持った人同士でグループができる。「けいおん!カフェ」内にも、痛車グループ、女装グループ、フィギュアグループ等が出来始めた。各グループで思い思い好き勝手に過ごしているが、宮川氏は特に何も言わない。あるグループから別のグループに対するクレームが来ても「こういうことはしてはいけないよ」と言うことはない。「まあまあ、穏便に」となだめ、調整を行っている。各グループでそれぞれ楽しんでくれればよいという姿勢だ。その宮川氏の元に、この場所に惹かれたボランティアスタッフが集まってくる。彼らはアニメや旧豊郷小学校、豊郷という地域、そこで一緒になった仲間等対象は様々であるが、好きでこの場所に来ている。イベントを企画したり、スタッフとして働いたりしている。決して見返りは求めていない。

南草津から来ているボランティアスタッフのいずみさんは、当初バイク仲間の中で「けいおん!」が面白いと話題になっていたことがきっかけで豊郷小学校を訪れた。音楽畑だったため、豊郷小学校に来た時、展示されている楽器を手にしている人が多く気になった。当時 mixi でバンド仲間を募集しており、校舎3階で行われていたセッションに参加した。現在は軽音甲子園のスタッフもしているが、ここで知り合った仲間と一緒にやって一緒に盛り上がり、というのが楽しいということだ。「僕は技術集団なので、各自で出来る技術を持ち寄って何か一つのものを作り、一緒に盛り上がっている。アニメが好きというよりも、その場所でメンバーと集えるかに重きを置いている。今後は聖地から新しいものを発信していきたい」とこれからも豊郷で活動を継続していく意向だ。

宮川氏はこの9年間で、いろんな人と話すことが出来て人生の中で大きな9年だったと振り返る。9年続けられたのはここに来るファンがいたからだという。

アニメで有名となり、小学校自体のファンも増えた。また、

外国人も多く来ていて、「けいおん!」を知らない訪問者も多いようだ。この状況を地域の人も受け入れてくれるようになり、地域外の人が多くいる光景が自然になりつつあるということだ。

3. 涼宮ハルヒシリーズ

「涼宮ハルヒの憂鬱」がアニメ放送された2006年以降、多くのアニメオタクが聖地巡礼のため西宮市を訪れた。しかし、「らき☆すた」の鷺宮町に見られるようなオタクと地域の人たちが一体となった交流は西宮では大きな動きにはなっていなかった。その状況が気になって仕方がなかった聖地巡礼者であるnonki氏は、周囲で聖地巡礼活動を行っているオタクたちに呼び掛け、2012年1月に「関西新文化振興会」を立ち上げた。nonki氏は西宮の地で「涼宮ハルヒ」に関して各方面の人々が足踏みをしてなかなか踏み出せないでいる中、自身が「火を点ける役」になることを決心した。会の目的は(1)展示等による「新文化」の啓蒙活動、(2)「新文化」に関する文化的研究活動、(3)「新文化」を振興するための諸活動である。

立ち上げ後、「涼宮ハルヒ」の聖地の一つである珈琲屋ドリームで、神戸夙川学院大学の原一樹准教授(当時)と出会った。当時、原氏は学生のゼミで涼宮ハルヒを題材に研究していたため、nonki氏が「今度こういうことしたいんです」と構想していたイベント内容を話したところ、協力が得られ、「ハルヒサマーフェス2012」に向けての準備が始まった。nonki氏は、「ハルヒサマーフェス」によって、ファン・研究者・地元住民を広く対象とし、それらが交わり合うなかで面白く、そして何らかの良き反応が起こることを期待していた。夙川学院中学校・高等学校の会議室も無償で貸してくれることとなり、また、夙川学院大学の観光学をテーマとした研究発表もプログラムに加わった。涼宮ハルヒシリーズに関するものや、西宮や阪神間の文学作品に関する展示、調査報告会、聖地探訪ツアーを実施した「ハルヒサマーフェス2012」は約200人が来場し、51人がスタッフとして参加した。来場者に対し実施したアンケートでは約6割から満足との回答を得られたが、「撮影が出来な

くて残念だった」、「展示物が置いてあるだけになっていて説明不足」、「『ハルヒサマーフェス』と銘打っている割にはハルヒと接点の薄い報告が多くて残念」、「運営面(受付・案内・司会進行等)の準備不足が目立った」などの声が届いた。

この反省点を踏まえ、翌年関西新文化振興会は「ハルヒサマーフェス2013」を同じく夙川学院で実施した。前年出来なかったことをたくさん詰め込んだ宝箱のようなイベントにしたいと考え、企画段階において、会員が面白いと思った多くの企画を盛り込むこととした。「ハルヒサマーフェス2013」には約150人が来場し、「展示企画・痛車展示」、「発表企画」、「同人誌即売会」、「探訪ツアー」、「コスプレ」が実施された。また、スタッフとして27人が参加した。前年よりも来場者、スタッフの人数がともに減少したが、nonki氏を含めた会の執行部は西宮の地で出来る限りの「涼宮ハルヒ」の企画を行うという、目指していた点を達成できたと実感していた。事実、「ハルヒサマーフェス」を開催したことで、関係者を刺激し、それまで公式的に行われていなかった「涼宮ハルヒ」関連のイベントが実施された。西宮まち旅博覧会実行委員会主催の「SOS 団 in 西宮に集合よ!」(2012年10月から11月)、西宮市立鳴尾図書館における「涼宮ハルヒと阪神間の文学」(2014年3月から4月)、そしてファン有志によって結成されたNON管弦楽団による「第1回定期演奏会」(2014年7月5日)の開催へとつながっている。

そのため、2014年の「ハルヒサマーフェス」は規模を大幅に縮小させ、「涼宮ハルヒシリーズ」に関する本を持ち寄り、読書会を開催した。10名の参加者で、終始ゆったりとした時間だったということだ。

その後、2015年以降はnonki氏が仕事の関係で東京に転勤となったため関西新文化振興会の活動はストップしていたが、2017年に関西に帰ってくることができ、再び関西新文化振興会主催のイベントを復活させることを画策している。

4. ガルパン

2012年のガルパン放送前、アニメ制作側より大洗町を舞台にしたいことが大洗町商工会長で当時県議会議長だった田山東湖氏に伝えられた。田山氏は、その場で大洗まいわい市場の代表取締役・常盤良彦氏に電話をした。「いまから人がそっちに行く、お前アニメやれ、アニメ」。常盤氏を中心にガルパンのごく小さなプロジェクトチームが組まれた。気心が知れていて、失敗したら「ごめんね」と言えるプロジェクトチーム「コソコソ作戦本部」が誕生した。メンバーは常盤氏と肴屋旅館本店の7代目である大里明氏、また、当時大洗ホテルに勤めていた島根隆幸氏の3名が中心となって大洗をガルパンで盛り上げる作戦が開始されていく。これにはアニメがどういった作品になるのかを見定めるまで、なるべく地元商店街の人々を巻き込まないという常盤氏の配慮があった。しかし、作品の宣伝ポスターの掲示をする際、大洗町外にまで貼りに行く人手が足りなかった。そこで常盤氏は、経営するレストラン「クックファン」の常連客にその役割を依頼した。その協力者たちとともに常盤氏は「勝手にガルパン応援団」を結成した。初期の活動はお店などへのポスターの掲示だったが、その活動範囲はガルパンの認知度の上昇とともに拡大し、次第に人手が足らなくなっていった。知り合いに声をかけ、メンバーを増やし、現在はガルパン関連イベントの企画設営ほか、キャストのアテンドや警備、会場のセキュリティなども担当している。2016年3月に「勝手にガルパン応援団」から「イベントサポーターズKGO」に名称が変更された。

「イベントサポーターズKGO」は、主に大洗の中でのガルパン関連イベントを手伝うボランティア集団である。しかし、全くの未経験者を集めた集団ではなく、自分の会社や自治会などで、イベント運営を経験したことがある人を選定している。中にはコミックマーケットの混雑対応スタッフを経験した人もいた。「イベントサポーターズKGO」は何かしらの実務経験者の集まりということだ。

チーフの井堀嘉延氏が参加することになったきっかけは、お客として見に行った2012年の「あんこう祭」だった。そこで、友人が「勝手にガルパン応援団」メンバーとして参加しており、その友人からトークショーのステージ後方の横

断幕が倒れないように押さえてほしいと頼まれた。これが「勝手にガルパン応援団」での初仕事となった。その次のイベントには当日スタッフとして参加し、「撮影禁止」と書かれた札を持つ仕事だった。やがて行事も増え、色々なところからイベントの依頼が届くようになると、常盤氏も多忙となり対応しきれなくなっていった。そんな時、井堀氏は普段は建設の仕事の経験を活かし、依頼書類を元に自分なりに工程表を作った。誰がどこにいて何時から何時まで働くのかなどを具体的に表に書き、出演者の流れや時間配分も分かるようにした。それが評価され、本格的に参加するようになり、イベント当日のスケジュール管理や工程表を任せられるようになった。

「イベントサポーターズKGO」ではガルパン関連のイベントの中でも、著名なゲストや声優が関わる部分を担当している。具体的には、スケジュール管理やセキュリティなど、主催者と協力してアテンド業務を行う。加えて、イベント内容の企画や交渉も行っている。主催者がやりたいことを実現させるために、常盤氏とともに声優の事務所と企画を練って実現化させる。その決定内容に沿ってプランニングを行い、進行表、警備体制とアテンドスケジュールを作る。マニュアルは50分の声優トークショーイベントで20～30ページになるという。ボランティアながら広告代理店も驚くクオリティだ。

2018年3月現在のメンバーは約13人。「面白いからそのまま続いていますね」、「無事にイベントが終わって、温泉施設で熱い風呂に入って、お疲れ様の打ち上げができるのが一番の楽しみ」という声も聞こえる。合言葉は「失敗も成功も共有しよう」だ。例えば、3人のチームが何かを成功させた場合、チームリーダーには「僕が頑張りました」ではなく「彼らが頑張りました」と言える人間を選んでいる。逆に失敗した時は全員で謝りに行く。

イベント参加者が多くなるにつれ、警備のランクは上げざるをえなくなるなど難しさも出てくる。それでいて、お客の満足度をあげるためにはどうすればいいかと考え、現場に何回も足を運び、必要ならプロにレクチャーを受け、シミュレーションを何回もする。大洗には大きなイベントが年に4回あ

り、3、4ヶ月前から動き始める。ほぼ1年中活動しているような状態が続いている。お客さんに楽しんでもらえるイベントを作り上げるというのがモチベーションとなっているということだ。

彼らは、最初から現在のスキルを保有していたわけではなく、徐々にステップアップしていった。ガルパンのファンであったが、自分の仕事にプロ意識を持つようになり、それが依頼する側からの信頼を得ることにつながっていく。

追加メンバーは既存メンバーが必ず一本釣りで見つけてくるため、考え方の統制が取れているという。

V. 各ケースの分析

1. 「らき☆すた」と鷲宮地区のケース分析

「らき☆すた」の舞台となった鷲宮地区では、商工会が中心となって、うまく版權元の角川書店と連携し、アニメ聖地巡礼者にとって魅力あるまちに変化した。商工会は当初、対応策がわからなかったため、聖地巡礼者に直接聞き、それをきっかけとしてイベント開催時にアニメオタクが手伝うようになった。そのようにして、「らき☆すた」でまちが盛り上がっていた時、まちの伝統のお祭りに参加したいというアニメオタクの声から「らき☆すた神輿」が作られる。このお神輿を1年に1度のお祭りで担ぐため、全国からアニメオタクが鷲宮に集まる。オタク同士、また、地元の人とアニメオタクの相互作用が生まれ、お互いに影響され合うようになる。非公式組織が誕生し、時間の経過とともにそれに関与する個人は変化していく。いつしか「らき☆すた神輿」をずっと続けたいと思うオタクが現れ、非公式組織は共通目的を持った公式組織「らき☆すた神輿準備会」となっていく。「らき☆すた神輿準備会」代表の大木氏はアニメオタクが“帰郷”してくる場所を守り続けたいと語っている。鷲宮はアニメオタクにとって、個性が発揮できる場となっている。地元の人たちに受け入れられながら、また、相互に作用し合いながら、大木氏は使命感を持ち組織運営を続けている。「らき☆すた神輿準備会」に参加している人たち

も強い協働意欲があり、見返りを求めず楽しみながら自分の時間や努力を捧げている。

2. 「けいおん!」と豊郷町のケース分析

豊郷町の商工会青年部の部長（当時）だった宮川氏は後輩と会話の中で旧豊郷小学校がアニメ舞台になっていることを知った。工事中だった校舎に聖地巡礼者が訪れ始めたが、これが「らき☆すた」の鷲宮のようになるのか疑心暗鬼だった。旧豊郷小学校を訪れてくる巡礼者に工事が明けた初日に宮川氏を中心とした有志でうどんを振る舞った。それが盛況だったことから、役場、観光協会、商工会で協議し「けいおんでまちおこし実行委員会」が作られた。後輩との会話から状況を知った宮川氏だったが、うどんを振る舞った時のアニメオタクとの相互作用により影響され変化が生じた。この点から、非公式組織（宮川氏と後輩）より公式組織である「けいおんでまちおこし実行委員会」が作られたことがわかる。宮川氏は実行委員会の委員長となり、訪問してくる巡礼者にこの場所で何をすればよいか直接聞いた。そして「けいおんカフェ」を開き、アニメオタクから多くの楽器などの寄贈があり、場が整っていく。また、そこに集うスタッフが見返りを求めずに意欲的に働いてくれていることを見てリーダーシップスタイルを変えた。巡礼者各々を調整すれば各々で楽しんでくれるため、調整役に徹している。地域の人にも受け入れられたため、「けいおんでまちおこし実行委員会」としてがむしゃらに動かなくてもよくなった。巡礼者との相互作用により共通目的も変化し、当初より緩やかになっている。

3. 「涼宮ハルヒ」シリーズと西宮市のケース分析

アニメ「涼宮ハルヒ」シリーズの聖地の一つに珈琲屋ドリームがある。そこではアニメオタクが涼宮ハルヒを話題に交流し、物語上重要な七夕祭を実際に行ったりする。ドリームに何度も来ていた nonki 氏は常連客と交流を深めるが、涼宮ハルヒの聖地西宮でイベント開催など大きな動きがないことを憂慮していた。そんな時に神戸夙川学院大学の原一樹准教授（当時）と出会い、「自分はこのイベントをしたい」と話した。その実現に向けて連携することとなり、

nonki氏は仲間に呼びかけ、関西新文化振興会を立ち上げた。共通目的のなかった非公式組織の2人の会話から、共通目的のある公式組織が立ち上がった。2012年～2014年に「ハルヒサマーフェス」が開催され、それぞれの準備や運営で相互作用が行われたと考えられるが、参加スタッフ者数、来場者数ともに年々減少した。また、リーダーのnonki氏が、他団体が涼宮ハルヒ関連のイベントを開催したことに満足感を持ち、役目を終えたという認識に達してしまった。nonki氏の転勤もあり、現在活動休止中であるが、過去の反省点を踏まえ、昔の仲間に呼びかけ、再興を計画している。

nonki氏の転勤で組織の活動がストップしたように、後に続く人が出てこない。また、他団体が涼宮ハルヒ関連のイベントを実施しても単発で終わり、2回目、3回目と続いていない。これは原作最新刊が長らく出ていないためなのか、西宮という都市的土地柄のためなのか、現在のところ不明である。この点は今後の検討事項とし、別稿で考察したい。

4. 「ガルパン」と大洗町のケース分析

「イベントサポーターズKGO」の前身である「勝手にガルパン応援団」は常盤氏が経営するレストランの常連客の集まりだった。レストランで常盤氏との会話から、当初はポスター貼りなど軽い仕事をお願いされた。非公式組織である常盤氏と常連客との相互作用から、まずはお手伝いという緩やかな共通目的のある公式組織「勝手にガルパン応援団」が結成された。イベント開催時の手伝いも任せられ、ある時井堀氏は自分の仕事でやっていることを活かし、イベント開催に向けての工程表を作成した。これをきっかけとして、お手伝いという枠を超えて、イベント開催時の企業との交渉など本格的な仕事を任せられるようになった。リーダーも誕生し、次第に共通目的も浸透し、統率の取れた組織となっていく。新たなメンバーの採用も、ある種企業のように選抜されている。当初は緩やかな組織体制だったが、次第に変化し、現在ではボランティアではあるが、プロフェッショナルリズムを持つ組織となっている。組織内のメンバーも

当初は緩やかな協働意欲のもと動いていたが、次第に大きな仕事を任せられ、個性を思う存分発揮できるその仕事が面白くなっていったのであろう。見返りを求めないが、協働意欲の高いメンバーが集まる組織となった。

VI. 本研究の理論的貢献と実務的貢献

1. 理論的貢献

本論文の4ケースでは、全てのケースで自然発生的に非公式組織が形成されていることを確認できた。「らき☆すた」は祭りの参加者、「けいおん!」は宮川氏と後輩との会話から、また、「涼宮ハルヒ」は珈琲屋ドリームのお客同士、「ガルパン」は常盤氏とレストランの常連客との関係性から相互作用が起き、非公式組織が形成された。そこから使命感を持ったリーダーが出現し、共通目的を持った公式組織に転換している。リーダーは、Barnard (1938/1956)の指摘するその機能としての必要性からだけではなく、自ら名乗り出て各組織の運営に当たっている。

Barnard (1938/1956)の組織の発生方法に当てはめれば、「らき☆すた」、「涼宮ハルヒ」、「ガルパン」の聖地巡礼をきっかけとして出来た組織は、個人の組織努力から生じた直接的な結果であり、「けいおん!」の場合は現存する母体組織（役場・商工会青年部・観光協会）から育成された幼い組織から生じている。組織の共通目的や組織体制も変化しており。下記の表1は4ケース中の各組織における共通目的及び組織体制の変化を主観で表したものである。当初は「まちおこし」や「イベントを実施して火を点ける」などのしっかりとした共通目的で運営されていた組織は時間を経過するに連れて、緩やかな共通目的と組織体制で運営されていたりと変化が起きている。また、「ガルパン」のケースのようにその逆パターンも見られ、そのよし悪しの判断はできない。

このように、本論文では非公式組織から公式組織が発生するプロセス、そしてその変化を明らかにした。また、組織内の共通目的や組織体制も変化することが確認でき、ア

表一I 各組織の共通目的及び組織体制の変化（筆者作成）

作品名(カッコ内は聖地)	共通目的	組織体制
らき☆すた (埼玉県鷲宮地区)	しっかりとした共通目的のまま変化なし	しっかりとした組織体制のまま変化なし
けいおん! (滋賀県豊郷町)	しっかりとした共通目的→ 緩やかな共通目的	しっかりとした組織体制→ 緩やかな組織体制
涼宮ハルヒシリーズ (兵庫県西宮市)	しっかりとした共通目的→ 緩やかな共通目的	緩やかな組織体制だったが目的達成のため活動 休止状態
ガルパン (茨城県大洗町)	緩やかな共通目的→ しっかりとした共通目的	緩やかな組織体制→ しっかりとした組織体制

アニメ聖地に関する研究に貢献できたと考えている。

2. 実務的貢献

ある地域が注目され、そこへ多くの人々が訪れ、それに対応するための組織が作られる。コンテンツの流行り廃りもあり、その組織が何年も続けて存在していることは稀である。今回取り上げた4つのケースでは、一部活動休止中のものもあるが、組織が何年も続いている。最初は非公式組織が生まれたが、どのケースでも共通目的を持った公式組織に変化した。その組織と、それが作り出す場があり、組織と場が継続することで以下の人々が生まれることが明らかとなった。

- ・聖地へ移住してくる人々
- ・聖地に集うメンバーに会いにくることが目的の人々
- ・そのまち自体を好きになってくれる人々
- ・リピートして訪問し、まちの魅力など新たな発見を地元

の人にフィードバックする人

まち側にも変化が起き、湯川（2017）にあるように訪問者と地元住民との間に価値共創が起き、相乗効果が発揮されている。そこにつながる組織の形成プロセスやその後の変化を明らかにしたことが、本論文の実務的な貢献として挙げられる。

VII. 今後の研究の方向性

組織の内部では、様々な動きがある。本論文では、リーダーシップ、フォロワーシップ、組織市民行動、組織内に出

来た非公式組織の動き等が明らかにされていない。どのようなメカニズムで動いているのか、時間の経過とともにどのように変化していくのかを究明する必要がある。アニメ聖地に出来た組織に集まる人々は、見返りを求めずに活動を行う。これまでの研究とは異なったものが発見される可能性がある。

フォロワーシップに関する研究は、それ自体少なく、日本版フォロワーシップの特徴として、これまでの研究で挙げられている積極的行動、批判的行動、他に、配慮的行動、指示を促す行動が指摘されている（西之坊, 2015）。これもアニメ聖地の組織で究明を行うと違ったものが発見されるかもしれない。また、組織市民行動は、組織内では地味で些細なものであるため（Organ, 2007）、行為者が意識するのも難しく、外部者が発見するのも困難である。しかし、組織市民行動が組織に与える影響は大きいため、それを究明する必要がある。

References

- Barnard, C.I. (1938) *The Functions Of The Executive*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
(田杉競・矢野宏・降旗武彦・飯野春樹（訳）(1956).『経営者の役割』ダイヤモンド社)
- Organ, D.W., Podsakoff, P.M., & MacKenzie, S.B. (2006) *Organizational Citizenship Behavior*: London and New Delhi by Sage Publications, Inc. (上田泰（訳）(2007).『組織市民行動』白桃書房)

大洗町商工会 那須誠氏へのヒアリング 2017年7月24日

- 関西新文化振興会 nonki氏へのヒアリング 2017年5月10日
- 関西新文化振興会 (2012)「ハルヒサマーフェス2012実施報告」, 1-20
- 関西新文化振興会 (2013)「関西新文化シンポジウム・ハルヒサマーフェス2013実施報告」, 1-14
- 関西新文化振興会 (2014)「2014年活動報告」, 1-16
- けいおんでまちおこし実行委員会 宮川博史氏へのヒアリング 2018年7月15日
- 谷村要 (2011)。「コミュニティ」としての『アニメ聖地』豊郷町の事例から』『大手前大学論集』11巻, 139-150.
- 谷村要 (2012)。「アニメ聖地巡礼者の研究 (1) 2つの欲望のベクトルに着目して」『大手前大学論集』12巻, 187-199.
- 西之坊穂 (2015)。「日本の組織におけるフォロワーシップ:フォロワーシップの内容と成果の検討」『大阪府立大学博士学位論文』, 1-160
- 湯川寛学・佐藤善信 (2017)。「アニメオタクの特徴と (消費) 行動の分析—『けいおん!』の聖地巡礼行動を中心に」『関西学院大学ビジネス&アカウンティングレビュー』第19号, 77-95
- 湯川寛学 (2017)。「アニメオタクと“聖地”との価値共創メカニズムの解明:『涼宮ハルヒ』『らき☆すた』『けいおん!』『ガールズ&パンツァー』の地域おこし事例分析」『日本マーケティング学会カンファレンス・プロシーディング』Vol. 6, 413-422
- Unknown (2018)「13万人参加のイベントを支えるボランティア集団」『月刊ぶらざ茨城版年』3月1日号, 20-21

【WEB ページ (アドレスは順不同)】

(らき☆すた)

らき☆すた神輿準備会 概要

<http://wasimiya.info/organization/outline/> (2018/08/12に確認)

Unknown (2017)。「涙で「神輿」継続、街づくりが「続編」に影響 “アニメ聖地”を勝ち取った鷺宮・横須賀」『AbemaTV原宿アベニュー』

<https://abematimes.com/posts/3003950> (2018/08/12に確認)

河瀨太郎 (2017)。「第10回らき☆すた神輿 聖地鷺宮に世界からファン集結」『Yahoo ニュース』

<https://news.yahoo.co.jp/byline/kawashimataro/20171002-00076457/> (2018/08/12に確認)

浅見裕 (2017)。「地元の人たちとの絆が生んだ、自分たちの“居場所”を守り続けたい」『さいたま祭り』

<https://www.saitamatsuri.jp/matsuri/hajisai/interview/> (2018/08/12に確認)

Hiroto Tai (2018)。「アニメと聖地巡礼——深夜アニメはまちを救う? : <鷺宮町> らき☆すた」『九州大学 Cute.Guides』

<https://guides.lib.kyushu-u.ac.jp/c.php?g=774972&p=5558616> (2018/08/12に確認)

(涼宮ハルヒ)

関西新文化振興会 HP

<http://knpa.info> (2018/08/05に確認)

(ガルパン)

Unknown (2018)「こちらガルパン出張所 大洗町回覧板 大洗町めぐり 第2回井堀嘉延さん」バンダイナムコアーツページ

<https://v-storage.bandainvisual.co.jp/talk/interview/84887/> (2018/08/05に確認)